

巻頭言

科学にはゴールがない

2016年のノーベル生理学・医学賞は、細胞が自らたんぱく質などを分解しリサイクルする「オートファジー」と呼ばれる仕組みを解明した、東京工業大学名誉教授の大隅良典先生に授与された。受賞会見で大隅先生は、28年間にわたり「オートファジー」の研究を続けてきたことについて、「この研究を始めたときに必ず“がん”の研究につながるのか、“寿命”の研究につながるかと確信して始めたわけではありません」「科学というのは実はゴールがなく、何かがわかったら必ず次に新しい疑問が湧いてくるということです」「科学は、どこに向かっているのかがわからないところが楽しいのです。『これをやったらよい成果につながります』と言うのは、科学にとってはとても難しいことです。すべての人が成功するわけではありませんが、チャレンジすることが科学の精神であり、その基礎科学を見守ってくれる社会になってくれることを期待したいです」と述べている。さらに、「“役にたつ”という言葉が、とても社会をダメにしていると思います。本当に役にたつのは、10年後か20年後か、あるいは100年後かもしれません。社会が将来を見据えて科学を一つの文化として認めてくれるようにならないかと強く願っています」と、現代の短絡的な成果主義を痛烈に批判している。

新入社員の自死をきっかけに過重労働問題が発覚した大手広告代理店の電通には、4代目社長の吉田秀雄によって1951年につくられた行動規範の「鬼十則」があり、長らく社員手帳「Dennote」に掲載されていたらしい。この「鬼十則」についてはパワーハラスメントに該当する文言が複数あり、賛同しかねる内容も多いが、一方で「大きな仕事と取り組み、小さな仕事はおのれを小さくする」「難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある」「取り組んだら放すな、殺されても放すな（注：筆者はこの部分には賛同しかねる）、目的完遂までは……」という3つの文言については、私たち研究者も肝に銘じるべき（遵守するかどうかは別として）内容であろう。これらは「短期的な結果を求めず」「目先の利害に捉われず」「長期的な目標を持って」という、大隅先生から若い研究者へのメッセージとも一致する内容のように思われる。

さて、広島国際大学看護学ジャーナルの第14巻を刊行することになった。ここ数年に比べて多くの論文が掲載されていることは誠に喜ばしい。第15巻にはさらに多くの先生方から論文をお寄せいただくことに期待したい。科学にはゴールがないのだから。

2017年3月

広島国際大学 看護学部長 島谷 智彦